

板木台帳紙背『覚勝院抄』の発見と紹介

永井 彰*

まえがき

私が平成二十二年度に受けた奈良大学研究助成の課題名は「奈良大学蔵板木の調査・研究(Ⅲ)」である。研究の主眼は、①奈良大学蔵板木及び関連文書の再調査・再整理、②それらの板木で印刷された版本の収集、③板木の新規収集の三点に絞られる。最終的に目指しているのは、板木と版本及び関連文書の照合による近世京都の印刷現場の復元である。さて、平成二十二年度の成果であるが、③については「当麻曼荼羅」の板木を新規に入手することが出来たが、それが高額であったため②の版本収集に充てる費用が少なくなり、こちらは『雅言通載抄』(揃い本四冊)『加之久全伝香籠草』(不揃い本二冊)の二部にとどまり、②③についてははかばかしい成果をあげるに至らなかった。が、①については竹苞楼旧蔵の板木台帳を見直した結果、重要な資料を発見・紹介することが出来た。それは平成十八年の秋に竹苞楼七代目佐々木惣四郎氏から託された『蔵板員数』『蔵板仕入簿』『板木分配

帳』『竹苞楼蔵板員数帳』の四点の蔵板台帳のうち、『板木分配帳』が『源氏物語』の古注釈書として有名な『覚勝院抄』の紙背を使用しているということであった。ことの重要性に鑑み、平成二十二年九月二十八日に奈良県庁文化記者クラブのメンバーに記者発表を行ったところ、当日夕方のNHKニュースで取り上げられ、さらに翌日の朝日・読売・産経・毎日の各紙奈良版、及び奈良新聞・京都新聞の紙面で大きく報道されるといったところとなった。それらのマスコミ発表の準備と併行して、『覚勝院抄』に最も詳しい実践女子大学教授上野英子氏にも資料を送付し、共同研究として『板木分配帳』紙背の『覚勝院抄』を、解題を添えて全文を影印として紹介することになり、その成果は実践女子大学文芸資料研究所年報第三十号(平成二十三年三月三十日発行)に「新出資料 竹苞楼板木台帳紙背『覚勝院抄』(断簡)―影印と解題―」として発表した。奈良大学総合研究所報への掲載も当然考えたのであるが、一丁を二頁の見開きにし

て合計八十頁近い分量の影印図版を収録する必要があったため、所報では対応出来ず、発表の場を別に求めざるを得なかった事情を諒とされたい。なお、右の論文はI「ことこのいきさつ」を記した永井担当稿、II書誌的な解題と諸本の中での位置付けに及んだ上野担当稿、III影印の三部から成る。以下には永井担当稿のみを転載した。II・IIIについては掲載誌を参照されたい。

1)このいきさつ

現在も京都寺町姉小路上に店を構える竹苞楼（現、竹苞書楼）は、代々佐々木惣四郎（佐々貴・鶴鶴・娑々岐とも、また錢屋とも）を名乗る寛延四年の創業になる古書肆で、近世期の本屋の面影を残す店構えでも知られる。同店はまた近世以来の板木を大量に保存しているということでも有名であったのだが、思い立つことあって同店蔵の板木約二千五百枚を奈良大学へ搬入し整理・調査を開始したのは、平成十六年四月のこと。七代目御当主佐々木英雄氏との最初の約束では、数年かけて整理をし、目録を作成して板木のデータを採ったあと御返しする予定であったのだが、同年十二月に氏から一括譲渡の御相談があり、膨大な量の板木は、十七年六月、奈良大学の蔵に帰することにいった。その板木、大略分類したところによれば、漢詩文集・伝記・随筆・和歌集・雑俳書・狂詩狂文集・有職故実書・辞典・茶道書・紀行文・歌集注釈書・四書五経・画集・史書・狂歌集・滑稽本・書道手

本・本草・仏書・印譜・篆刻書・硯譜等々、ジャンルは多岐に亘る。これらの板木は一年ほどかけて整理・調査したあと、十八年十月に奈良大学で開催された俳文学会第58回全国大会に合わせ「出版の現場から―竹苞楼旧蔵狂詩・狂文集の板木を中心に―」と題して展示史料目録を作成すると共に、奈良大学通信教育部棟展示室（現博物館展示室）で四十日に及ぶ展示を行ないその一部を一般公開し、その後も具体的な調査結果については、拙稿「竹苞書楼の板木―狂詩集・狂文集を中心に―」（奈良大学総合研究所報十五号、平成19年3月刊）、「『山家集抄』の入木」（同十六号、20年3月刊）などで発表して来た。また、十九年春には立命館大学アトリサーチセンターとの共同研究として、板木のデータベース化の話が持ち上がり、竹苞楼旧蔵のものをはじめ、藤井文政堂旧蔵で十数年前にやはり奈良大学の蔵に帰した約五百枚、それに現在本学へ寄託されている文政堂現蔵の約五百枚、さらに十九年秋に大阪の中尾松泉堂から引き取った高野版の板木約四百枚、また本学所蔵の浮世絵復刻版の板木約五百枚、その他のものも含め合計五千枚ほどの板木の基礎データ約八万コマの撮影を二十年三月に完了し、二十二年二月にはネットでの一般公開ではこびとなった（乞検索「板木閲覧システム」）。

さて、十八年の秋に展示を行なった折の会期末近く、文政堂の六代目当主藤井佐兵衛氏と連れ立って見学に来られた竹苞楼七代目佐々木惣四郎氏から「こんなものも出て来ました」として託された資料がある。それが、『蔵板員数』『蔵板仕入簿』『板木分配帳』『竹苞楼蔵板員

数帳』の四点の蔵板台帳であった。この四点の蔵板台帳の書誌・概略を旧稿「板木の分割所有」（奈良大学総合研究所報十七号、21年3月刊）から再掲してみる。

『蔵板員数』

横本一冊。寸法、縦150×横216耗。渋茶色表紙。前表紙に「蔵板員数」、後表紙に「竹苞楼」と墨書。全二百四丁。所々に余白を残し、その数三十二丁半。従って、墨付は百七十一丁半となる。元々は万延元年に六十一才で没することになる竹苞楼三代春蔭が嘉永・安政頃に調製したものと思しく、四代春明（明治十四年五九才没）、五代春吉（昭和二十六年七十三才没）と引き継がれ、昭和二十三年一月に至るまで折々に書き込みをして来ている。記されているのは、書名と板木枚数、相合か単独所有か、そして相合の場合は所持分の板木の板前、丁数、それに後日の板木移動などである。収録書目は全三百七十二点に及ぶ。

『蔵板仕入簿』

半紙本一冊。山吹色地に亀甲花形模様の空押し表紙。前表紙中央に「蔵板仕入簿」、後表紙に「竹苞楼」と墨書。専用箋に、書名、冊数、丁数、紙・表紙・摺り賃など諸費用、相合先、軒前、板賃などを記入。全百九十一丁。内、余白は計十八丁半。この専用箋には一丁につき二点が書き込まれるようになっており、合計三百四十五点が記入してある。これもまた『蔵板員数』と同じ頃

に三代春蔭によって調製され、四代春明・五代春吉が折々に書入れをして来たと見られるもので、昭和二十年三月までの書き込みがある。なお本書見返しに「明治十六年一月より改正蔵板仕入帳用也」とあり、春明の代に改正版が目論まれたらしいが、その後もこの元版に書き込みがあるところからすると、改正版は結局使われなかったらしい。『蔵板員数』には「相合」とだけ記されているものが、こちらで具体的にその相合先が分かるケースがある。

『板木分配帳』

大本一冊。縦247×195耗。薄茶色横刷毛目地表紙、紗綾形模様の空押しあり。表紙中央に大きく「板木分配帳」と墨書きし、左右に小さく「明治七年」「戊三月辰」と書く。後表紙に「竹苞楼蔵」と大書。全三十六丁。「南側之部 第壹号（〜第八号）」「東側之部 第壹号（〜第廿八号）」「北之部 第壹号（〜第四号）」「西壹号」「土間之部」などと分け、三百九十三点の書名・板木枚数を記入する。板木の収納場所の台帳である。年代の書き込みを調べると、明治二十三年から大正九年までに限られており、表紙にあるように明治七年に四代春明によって調製され、五代春吉の手許で使用されてきたものであることが分かる。

『竹苞楼蔵板員数帳』

大本一冊。縦256×186耗。薄茶色横刷毛目表紙。左肩に双辺白地題簽「昭和八年改正／竹苞楼蔵板員数帳」と墨書き。第一丁冒頭部に「蔵板員数帳 昭和八年／七月調査」とあり。本文は鳥の子の

上質紙。全三十三丁、うち墨付き二十丁。『板木分配帳』と同様、「北第壹号（〜八号）」「西第壹号（〜六号）」「東第壹号（〜三号）」と分けて、百十五点の書名・板木枚数を記録する。年代の書き込みは昭和九年から二十三年三月まで。五代春吉が『板木分配帳』をもとに再整理を企てたものであるが、『板木分配帳』に比べて収録点数が極端に少ないことから分かるように、結局は『板木分配帳』を主に使用して、こちらは途中でそのまま放置されたかの如き感がある。

右四点の蔵板台帳のうち、注目すべきは『蔵板員数』『蔵板仕入簿』で、この二点と現存の板木それに対応版本を照合することによって分かって来る近世後期京都本屋の板木分割のありようについては、前引拙稿「板木の分割所有」に詳述した。また、四点の中で最も興味をひく『蔵板員数』は、出版史料としての重要性に鑑み、拙著『藤井文政堂板木売買文書』（平成21年6月、青裳堂書店刊）に全文を翻刻紹介したところである。

『蔵板員数』『蔵板仕入簿』に比べると、『板木分配帳』『竹苞楼蔵板員数帳』の二点は要するに板木の収納場所の台帳なのであって、出版史料としての魅力にはやや欠けるため、精密な調査が後回しになっていたのだが、その後よく見てみるとこの二点、何れも古写本の紙背を使用していることに気付いた。そこで、代々佐々木惣四郎氏のお許しを得て、『板木分配帳』の紙縫り綴じをはずしてみたところ、三十六

丁全ての紙背が『源氏物語』の注釈書として著名な『覚勝院抄』の一写本であることが判明した。収録するのは「幻」の半分ほどと「匂宮」の影印複製本『源氏物語聞書』（野村精一・上野英子編、平成二年汲古書院刊）と対校してみると、仮名づかい・書式などが酷似し近接した関連性が認められ、素人目にも重要な資料であることが歴然である。奥書が残らないため筆者・書写年代なども不明で、穂久邇文庫本を含め十数本残存する写本の中の位置付けということになると、これはもう私の及ぶところではなく、この経緯のみ記して、あとはこの『覚勝院抄』についてもっとも詳しい上野英子氏にバトンをおわたしする次第である。

追記

この稿の校了間際の平成二十三年三月上旬、四点の蔵板台帳は竹苞楼から奈良大学に譲渡された。従って、今現在のもののありようからすれば、該書『板木分配帳』は「奈良大学蔵」と、その紙背の『覚勝院抄』も「奈良大学本」と称すべきであるが、ことのいきさつを明確に伝えるためにも、この稿では「竹苞楼蔵」「竹苞楼本」の呼称を残すことにした。

**Discovery and introduction of “Kakusyoin-syo”:
written by the reverse side of the block ledger.**

Kazuaki NAGAI